HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ほどほどの懸想』覚書
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大學文學部紀要, 46(2), 127-152
Issue Date	1998-01-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33704
Type	departmental bulletin paper
File Information	46(2)_PR127-152.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『ほどほどの懸想』覚書

後藤康文

本稿は、『堤中納言物語』所収の一篇『ほどほどの懸想』をとりあげて、従来の注釈書の不備や誤りをいくつか指摘し、いささかの卑見を述べることを目的とするものである。

『堤中納言物語』の本文は、高松宮家蔵本（池田利夫解題、復刻日本古典文学館）、宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本（池田利夫解説、笠間書院）、広島大学蔵浅野家旧蔵本（塚原鉄雄解説、武蔵野書院）、穂久邇文庫蔵久邇宮旧蔵本（久曾神昇解題、汲古書院）、吉田幸一氏蔵平瀬家旧蔵本（吉田幸一解題、古典文庫）、桃園文庫蔵島原本（寺本直彦解題、東海大学出版会）、桃園文庫蔵榊原本（同上）、三手文庫蔵今井似閑自筆本（塚原鉄雄・神尾暢子校注、新典社）の八本を参照し、適当と思われるかたちで引用した（頁・行数の表示については、とりあえず最後にあげた新典社本のものを掲げたが、特別な意味はない）。

また、今回参照あるいは引用した『堤中納言物語』の注釈書その他と稿中における略称は以下のとおり。

・久松潜一『校註堤中納言物語』（明治書院、昭三）……『校註』

・清水泰『増訂堤中納言物語評釈』（立命館出版部、昭九）……『評釈』
・佐伯梅友『新註国文学叢書・堤中納言物語』（講談社、昭二四）……『新註』
・松村誠一『日本古典全書・堤中納言物語』（朝日新聞社、昭二六）……『全書』
・吉沢義則監修『堤中納言物語新講』（藤谷崇文館、昭二七）……『新講』
・上田年夫『堤中納言物語新釈』（白楊社、昭二九）……上田『新釈』
・佐伯梅友・藤森朋夫『堤中納言物語新釈』（明治書院、昭三一）……佐伯・藤森『新釈』
・寺本直彦『日本古典文学大系・堤中納言物語』（岩波書店、昭三二）……『大系』
・山岸徳平『堤中納言物語全註解』（有精堂、昭三七）……『全註解』
・松尾聡『堤中納言物語全釈』（笠間書院、昭四六）……『全釈』
・稲賀敬二『日本古典文学全集・堤中納言物語』（小学館、昭四七）……『全集』
・土岐武治『堤中納言物語の注釈的研究』（風間書房、昭五一）……『注釈的研究』
・池田利夫『旺文社文庫・現代語訳対照堤中納言物語』（旺文社、昭五四）……『対照』
・三角洋一『講談社学術文庫・堤中納言物語全訳注』（講談社、昭五六）……『全訳注』
・塚原鉄雄『新潮日本古典集成・堤中納言物語』（新潮社、昭五八）……『集成』
・稲賀敬二『完訳日本の古典・堤中納言物語』（小学館、昭六二）……『完訳』
・大槻修『新日本古典文学大系・堤中納言物語』（岩波書店、平四）……『新大系』
・土岐武治『堤中納言物語・校本及び総索引』（風間書房、昭四五）……『校本』

なお、各種散文文献の引用は各々所掲の書物に基づいたが、いずれも漢字・仮名づかい等の表記を適宜改めてある。

一

頭中将の御小舎人童、「思ふさまなり」とて、いみじうなりたる梅の枝に、葵をかざして取らすとて、

梅が枝に深くぞ頼むおしなべてかざすあふひのねも見てしがな

といへば、

しめのなかの葵にかかるゆふかづらくれどね長きものと知らなむ

と、おし放ちていらふもされたり。（P97L7〜P99L1）

明るい華やぎに満ちた葵祭のその日、頭中将に仕える小舎人童が、ひとりの美しい女童を見初めてすぐさま求愛の歌を贈り、女童もこれを受けてなかなか達者に切り返す。この贈答をきっかけとして、ふたりはやがて結ばれることになるのだが、ここで取りあげておきたいのは、傍線部「いらふ」の問題である。いうまでもなく、「いらふ」は下二段活用の動詞であって、それがこのように四段活用で用いられるのはきわめて不審だからだ。そこで、当然のごとく次のふたとおりの解決案が用意されることになる。そのひとつは、

○活用破格、函・浜・信「いふ」がよいか。（『大系』・頭注）

○諸本に「……いらふも」とあるのは「いふ」の「ふ」が「らふ」と誤写せられたのである。故に改めた。（『全註解』・考異）

とする考え方で、「ら」を衍字とみる、原形「いふ」説であり、もうひとつは、

○「いらふ」は「いらふる」の誤写か、誤用か（誤用ならこの一篇の成立時代が中古であることを疑う材料となる。）。（『全釈』・注）
浜臣本「いふ」。（『新大系』・脚注）
○「いらふる」の誤写か。

とみる考え方で、「る」の脱落を想定する、原形「いらふる」説である。問題の「いらふ」を「破格」（『大系』）ないしは「誤用」（『全釈』）としないかぎり、この両説のいずれかが正解だと考えてよいだろう。が、その見きわめはなかなかむつかしい。

「いらふ」は、他者の問いかけに対して「返答する」意の動詞であるために、多くの場合相手のことばを受けることになるが、同じ『堤中納言物語』中の作品でいえば、『このついで』の次の一節、

この中隔ての屏風のつらに寄りて、ここにもながめ侍りしかば、いみじうしのびやかに、
厭ふ身はつれなきものを憂きこともあらしに散れるこの葉なりけり

風の前なる」と、聞ゆべきほどにもなく聞きつけて侍りしほどの、まことにいとあはれにおぼえ侍りながら、さすがにふといらへにくく、つつましくてこそやみ侍りしか。

（P19L1～P20L3）

のように、文脈上「返歌する」意に解すべき例もまま見うけられるし、さらには、

「いでや、さばれや。今はかぎりの身なれば、もの恐ろしくもあらずなりにたり。さても負け給ひしこそ、いといとほしかりしか。おいらかに召し入れてやは。目くはせ奉らましかば、こよなからましものを」などいひて、

いでやなぞ数ならぬ身にかなはぬは人に負けじの心なりけり

中将、うち笑ひて、

わりなしや強きによらむ勝ち負けを心ひとつにいかがまかする

といらふるさへぞつらかりける。

（『源氏物語』竹河巻／日本古典文学全集―(5)・P79）

のごとく、相手の「歌」を受けて「歌」で応答した用例も確かに存在する。このパターンは先の『ほどほどの懸想』の場合と基本的に同じであり、してみればまず、両説のうち「いらふる」説にはじゅうぶんに成り立つ余地があるといってよいだろう。

だが、その一方で、このような例に遭遇するのもまた事実なのである。

さて、この心変はるやうにしければ、

あひ見てののちぞくやしさまさりける つれなかりける心と思へば

とあるを見て、男、

見てのみぞわれはもえます春山のよそのなげきを思ひつぎつつ

といらへど、なほ心ざしのおろかなるやうに見えければ、女、

今よりは富士の煙もよに絶えじ燃ゆる思ひの胸に絶えねば

（『平中物語』第九段／日本古典文学全集・P482〜3）

これは、当面の問題を考えるうえできわめて貴重な用例といえよう。なぜならば、右の「いらへ」が露呈している活用上の不審が『ほどほどの懸想』のそれとまったく同質であるばかりか、このケースでは「る」一字を補えば済むというような単純な誤写は想定しづらいからである。すなわち、「いらふ」に固執する以上『平中物語』の例も正しくは「「いらふれど」とあるべきところ」（全集本頭注）なのだが、「いらふれ」が「いらへ」に写し誤られたとはとうてい思われないというわけだ。ふたつの「いらへ」が同じ次元にあるにもかかわらず、この相違はどうにも解せない。いっそのこと四段活用動詞「いらふ」の存在を認知してしまえばよいようなものだが、それもためらわれる。となれば、〈矛盾〉を一挙に解消する手段はただひとつしか残るまい。要するに、双方の「ら」の字を等しく衍字と判断して除去してやればよいのである。そうすると、時として孤本の危うさを曝け出す『平中物語』の疑問例「いらへど」も、すんなり「いへど」と読めて落ち着くことになるのだが、この結果はとりもなおさず、はじめに紹介した原形「いふ」

説の妥当性を強く支持するものといえよう。

このとおり、いずれの考え方にも相応の根拠があって判定に苦しむところだけれども、本稿では、右に述べた『平中物語』の「いらへ」との関連をより重視し、また、転写過程における「ら」字の機械的添加・脱落は実に頻発に起こる現象であったこと、歌は通常「いふ」ものであること等の要素を考慮に入れて、ひとまず「いふ」説の方に与しておきたい。ちなみに記せば、すでに引いた『全註解』以外では、『評釈』『新註』『全書』佐伯・藤森『新釈』が「いふ」の本文を採っている。

それにしても、この箇所について何の注も付していない注釈書が多いのは、いったいどうしたことだろう。確かに作品の理解を左右するような重大な問題ではないし、紙面の制約などやむをえぬ事情が働いてもいよう。しかし、下接する係助詞「も」がこの場合動詞連体形を受けるのは明白であるのに、「底本（＝浅野家旧蔵本）のまゝで不都合はない」（上田『新釈』・語解）と考えるのであれば、その理由はやはり明示すべきではなかろうか。

二

君の御方に若くて候ふ男、好ましきにやあらむ、定めたるところもなくて、この童にいふ、「その通ふらむところはいづくぞ。さりぬべからむや」といへば、「八条の宮になむ。知りたる者候ふめれども、ことに若人あまた候ふまじ。ただ、中将、侍従の君などいふなむ、かたちもよげなりと聞き侍る」といふ。

（P103L5～P104L5）

頭中将に仕える好色な若者と小舎人童との問答だが、問題は傍線部「かたちもよげなり」にある。諸注のほとんどは、これを「器量もよさそうだ」（『全集』／『完訳』）、「顔かたちも美しい様子である」（『注釈的研究』）などと訳してあっさりと済ませているのだけれども、この本文の異様さに気づいていないとすればいささかお粗末な話ではあるまいか。その根拠はいたってはっきりしている。すなわち、「よげなり」ということばが名詞と結びつく場合には、

・日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声も心地よげなるに、親王たち、上達部よりはじめて、その道のは、みな探韻賜はりて文作り給ふ。（『源氏物語』花宴巻／日本古典文学全集―(1)・P423）

・さぶらふ人々、ほどほどにつけてはよろこび思ふ。京よりも御迎へに人々参り、心地よげなるを、主の入道涙にくれて、月も立ちぬ。（同明石巻／同―(2)・P253）

・されど、行く道に心をやりて、いと心地よげなり。（同蓬生巻／同・P329）

・御帳、御几帳、みな紅梅の織物にて、女房も、その色々をのをの数知らず重ね着て、（中略）思ふことなく心地よげにもてなすも、ことわりなり。（『夜の寝覚』巻一／日本古典文学大系・P88）

・上達部、殿上人、夜ごとに参りて、御遊びあり。殿の、例よりもいと心地よげにうち乱れ、はやさせ給へば、惜しむ人なくめでたくおもしろくて、このほど過ぎぬ。（同巻五／同・P390）

などのように、「心地よげなり」のかたちで用いられることが圧倒的で、それ以外でも「心」「気色」といった情意を

表す語にしか接続せず、「かたち」等の語に連結して人や物の外観美を賞賛することは決してないからである。

では、ここでそれに代わることばはといえば、当然「きよげなり」を想定すべきなのである。「かたち」を「よげなり」と表現した例が皆無であったのに引きかえ、「かたち」が「きよげなり」の用例は実におびただしい。左には『源氏物語』からその一端をあげるにとどめる。

・左中弁、講師仕うまつる。かたちいときよげなる人の、声づかひもののしく神さびて読みあげたるほど、いとおもしろし。（少女巻／日本古典文学全集―(3)・P20）

・内の大殿の君達は四五人ばかり、殿上人の中に声すぐれ、かたちきよげにてうちつづき給へる、いとめでたし。（真木柱巻／同・P374）

・舞人は、衛府の次将どもの、かたちきよげに丈だち等しきかぎりを選らせ給ふ。（若菜下巻／同―(4)・P161）

・かたちいときよげにおはします宮なり。（橋姫巻／同―(5)・P114）

・小宰相の君といふ人の、かたちなどもきよげなり、心ばせある方の人とおぼされたり。（蜻蛉巻／同―(6)・P234～5）

・ことはらからどもよりは、かたちもきよげなるを呼び出で給ひて（夢浮橋巻／同・P366）

結論はもはや歴然としているはずだ。傍線部本文「かたちもよげなり」は「かたちもきよげなり」に改訂されねばならないのである。ちなみに、『校本』によれば、現存諸本の中では唯一、刈谷図書館蔵村上忠順自筆本だけが「きよ

げなり」の本文を有しているようだが、この点に言及した、あるいはこのかたちの本文にいちおうの注意を払った注釈書は、「刈谷一冊本に「きよげなり」とある外、諸本は「よげなり」。」と記す『全釈』と、「一本「きよけなり」」と注する『新大系』の、わずかに二書を数えるのみ。しかも、この二書とて「きよげなり」の採用に踏み切っているわけではない。むろん、刈谷図書館本の本文が原形を保存しているとはとうてい考えがたい。けれども、結果からみれば、そこには正しいかたちが〈復元〉されていたといえるわけである。

実のところ、「きよげなり」と「よげなり」との交替（書写の次元でいえば、「き」一文字の添加または脱落ということになる）は、時折起こりうる現象だったようなのだ。いくつかの実例を示そう。

(a)「（上略）わが君をば、后の位におとし奉らじものをや」など、いとよげにいひつづく。
（『源氏物語』玉鬘巻／日本古典文学全集―(3)・P91）

(b)君たちの御供の人々、「何事ありつるならむ。めづらしき御対面に、いと御気色よげなりつるは、またいかなる御譲りあるべきにか」などひが心を得つつ、かかる筋とは思ひ寄らざりけり。（同行幸巻／同・P301～2）

(c)「（上略）おとどの御幸ひにてこそおはせめ」など、ことよく語らふ。出で立ちのものなど、げによげにいとかくおこすれば、心ゆきはてて
（『狭衣物語』巻一／日本古典全書―上・P254～5）

(d)御殿油をかかげて見奉り給ふに、色は、雪などをまろがしたらんやうに、そこひなく白く、きよげなるに、苦しげなる面つき、いとあかくにほひて
（『夜の寝覚』巻二／日本古典文学大系・P125）

『源氏物語』から採取した(a)の傍線部は、河内本系統の平瀬本で「きよげに」。同じく(b)は、別本のうち保坂本において「きよげなり」。(c)の『狭衣物語』のケースは、宮内庁三冊本が「きよげ」の本文。そして、(d)の『夜の寝覚』の傍線部本文は前田本によって校訂されたもので、大系本底本の島原本には「よげなる」とある。(a)(b)(c)は「よげなり」が「きよげなり」に、また、(d)は逆に「きよげなり」が「よげなり」に転訛した事例といえよう。

最後に、「きよげなり」と「よげなり」とが近接して使われた例を二三掲げて、本節の考察を締めくくることにしたい。

・祭のころは、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ、あやしき小家の半蔀も、葵などかざして心地よげなり。わらはべの袒、袴きよげにて、さまざまの物忌どもつけ、化粧して、われも劣らじといどみたる気色どもにて行きちがふは、をかしく見ゆるを　（『ほどほどの懸想』／P96L1～8）

・みな思ふことなげなるに、上ぞ、いと気高く、ものあざやかに、きよげなるさまして、さしも心地よげならず、いたく世を思ひむすぼほれたる気色にながめ給へば　（『夜の寝覚』巻一／日本古典文学大系・P113）

・さぶらふ人も、かかる山里にはつきなきまで、きよげにうち装束きわたりたれど、何の心地よげならず。　（同巻二／同・P180～1）

これらを眺めてみると、両語間の質的差異があらためて実感されるだろう。いうまでもないことだが、最初の例はほかならぬ『ほどほどの懸想』冒頭の文章である。

三

「御返りごとなからむは、いと古めかしからむ。今やうは、なかなかはじめのをぞし給ふなる」などぞ、笑ひてもどかす。（P105L6～P106L1）

頭中将方の若い男から突然に届けられた手紙を見て、八条の宮の某女房が発したことばであるが、ここでは、傍線部「もどかす」の解釈が問題となる。この語に関する従来の見解は、

○「もどく」は、さからい非難する意で、他の女房が返事をかくようにからかい気味ですゝめるのに対して、「いやだわ、そんなこと。」などいうことである。「もどかす」の「す」は使役法であるから、「いやだわ、そんなこと。」といわせる、という意となる。（上田『新釈』・語解）

○「もどく」から出た動詞で、もどくことをさせる意。ここでは、周囲から面白半分のおせっかいをいって、「ばかをおっしゃい。」とか、「そんなことがあるものですか。」などいうようにいわせる意である。（佐伯・藤森『新釈』・語釈文法）

○「もどかす」は、「待ち遠くて、心をいらゝ〳〵させる。はがゆがらせて居る。はかどらないで気をもませて居る」などの意。別に非難するなどの意もある。（『全註解』・語釈語法）

○そんなことあるものですかと、さからっていわせる意か。「もどかす」（四段）の形は疑問。（『大系』・頭注）
○「もどかす」が解しがたい。……このように四段動詞「もどく」（さからって非難する・悪く批評する）の使役の形とみると解けそうであるが、四段動詞「もどく」の未然形に使役の助動詞の「す」（下二段活用）が添ったものとすれば、上の「ぞ」の結びから考えて「もどかする」であるべきことになる。従って佐伯氏のように一つの動詞、すなわち「もどかす」という（他に中古中世の用例が知られていない）四段活用動詞の存在を推定せねばならない点に疑問はのこるようである。仮りに佐伯氏に従って「反論させる」と解いておくが、なお考えたい。（『全釈』・注）
○「もどかす」は非難させる意。「笑ひて」とのつながりが悪い。（『対照』・脚注）
○相手をいらだたせる、むきにさせる、の意か。「ぞ」の結びから「もどかする」とあるべきか。（『新大系』・脚注）

などのほか、「あふり立てる」（『評釈』・通釈）、「じれったがる」（『全書』・頭注）、「促す」（『新講』・通解）、「わざと相手をむきにさせたりする」（『全集』・現代語訳）、「逆らって言ひ聞かせるのである」（『注釈的研究』・通釈）、「その気にさせる」（『全訳注』・現代語訳）、「〔その女房を〕挑発する」（『集成』・傍注）というように、まったく一定していない。文献上の用例がほかに見あたらないことが、このことばの語義を特定するうえでの最大の障害になっているようだ。

ところが、動詞「もどかす」は、宮崎県の日向灘沿岸平野部から山沿いにかけての地域一帯（北は延岡市から南は

日南市あたりまで）では方言として今もなお確実に生きつづけているのであって、原田章之進編『宮崎県方言辞典』（風間書房、昭五四）の「もどかす」の項には、つぎのような記載がある。

○からかう。じらす。子供をあやす。「あんた人がいいき、みんながモドカスとじゃよ」西臼杵郡。延岡市。日向市。東臼―門川・諸塚・西郷・東郷。児湯―川南・木城。西都市。宮崎市。宮崎市檍。南那―北郷。日南市。東諸県郡。北諸―高城。

筆者がかつて宮崎大学に在職していたころ、実際に上記地方出身の学生たちから聞いた話によっても、動詞「もどかす」が、年上の者や強者が年下の者や弱者（主として子供や動物）をからかう、じらすの意で用いられていることは確かな事実のようである。これを『ほどほどの懸想』の当該文脈にあてはめてみると、年配の女房が、歌を贈られた年若い女房を「笑ってからかう」意に理解できて、すっきりした解釈が成り立つことになるだろう。方言の語義を遡らせて適用する際には慎重を要する場合もあろうが、このケースについていえば、宮崎方言を古語の残存とみて充当させることにまず問題はないと思う。

なお、『日本国語大辞典』も、方言の動詞として「もどかす」の項目を設け、「子どもなどをからかう。大分県・大分郡・宮崎県・鹿児島県・宝島」と説明しているが、少なくとも鹿児島県や宮崎県都城市などでは、「もどかす」は通用していないようである。

四

童を召して、ありさまくはしく問はせ給ふ。ありのままに、心細げなるありさまを語らひ聞ゆれば、あはれ、故宮のおはせましかば、さるべき折は、まうでつつ見しにも、よろづ思ひあはせられ給ひて、「世の常に」など、ひとりごたれ給ふ。（P107L7～P108L5）

小舎人童から故式部卿宮邸の心細げな様子を聞いた頭中将が、世の無常を思いしばし感慨に耽る場面。問題は、傍線部本文の処理のしかたにあって、これまでの考え方は、次の三とおりに分かれている。

A＝「あはれ、故宮のおはせましかば。さるべき折は、まうでつつ見しにも」よろづ思ひあはせられ給ひて、と処理する立場。↓『全訳注』（『集成』）

B＝「あはれ、故宮のおはせましかば」。さるべき折は、まうでつつ見しにも、よろづ思ひあはせられ給ひて、と処理する立場。↓（『評釈』『全書』）『新註』上田『新釈』佐伯・藤森『新釈』（『大系』）『全釈』『全集』『注釈的研究』（『対照』）『完訳』『新大系』

C＝「あはれ、故宮のおはせましかば。」と、さるべき折は、まうでつつ見しにも、よろづ思ひあはせられ給ひて、と処理する立場。↓『新講』『全註解』

Aは、「まうでつつ見しにも」までを中将の思惟と判断して、

○次に「と」を補う気持で解釈する　（『全訳注』・注）

考え方。ついでBは、「あはれ、故宮のおはせましかば」について、

○下に「さ心細げにてはおはせざらまし」などが省かれている。訳文としては便宜上仮りにこれだけを頭中将の詞としてかぎに入れて下に「と」を補ったが、原文としては以下の「さるべき折はまうでつつ見しにもよろづ思ひ合はせられ云々」は会話文のようで、やがてそれがそのまま地の文に変化してしまったと考えるべきであろう。（『全釈』・注）

と解く考え方。そしてCは、「あはれ、故宮のおはせましかば」のあとに、

○諸本には「と」が無いけれども、「……ましかハと」とあるものが、伝写の結果（中略）と、一字になってしまうことも、珍しくないのである。また、この一句は頭中将の独り言のようである。又、文章の上から見ても、ここは、「と」が存在すべき所である。（『全註解』・考異）

として、実際に「と」を補う考え方であるが、いずれも、頭中将の思惟部分を区切る引用の格助詞「と」を欲する点では一致しているといってよいだろう。私見もその点は同じであり、以上三説のうちではAの立場にもっとも近いのだけれども、考え方はまた別である。

すなわち、「まうでつつ見しにも」の「次に「と」を補う気持で解釈する」のではなく、「見しにも」を「見しにと」の誤写とみるのである。「と（止）」と「も（毛）」の交替はしばしば起こる現象なので、

◎「あはれ、故宮のおはせましかば。さるべき折は、まうでつつ見しに」と、よろづ思ひあはせられ給ひて

というかたちはじゅうぶんに想定可能だろう（旧稿「『ほどほどの懸想』試論――頭中将は後悔したか――」（「国語国文」第六十二巻第七号、平五・七）においても、このように本文を整定しておいた）。あとはそう考えるべき根拠だが、これはふたつほどある。そのひとつは、動詞「思ひあはす」の語義の問題。この語は、合点がゆく、思いあたるの意で用いられることの方が断然多いのだけれども、当該例のように、心中であれこれと考えあわせるの意に解すべき場合は、

・「(a)あやしく。かかるかたちありさまを、などて身をいとはしく思ひはじめ給ひけん。(b)物の怪もさこそいふなりしか」と思ひあはするに　（『源氏物語』手習巻／日本古典文学全集―(6)・P324）

・「(a)ありありて、いとかたくなしきわざかな。(b)わが年のほどよりも大人しき宰相中将のありさまを」など思ひあはせ給ふにぞ、「いと似げなうあるまじきことかな」と、ひとり笑みせられ給ひけり。

（『狭衣物語』巻四／日本古典全書―下・P173～4）

・「(a)この大臣の日本の人に馴れ、母宮もかの世の人なりけるゆゑに、この后の御あたりの人はかかるなんめり。(b)一の大臣のありさま、人々のものいひしなんどは、見も知らず、まことにあらぬ世とこそおぼえしか」と思ひあはするに

（『浜松中納言物語』巻一／日本古典文学大系・P191）

などのように、上に複数の「思ひ」が提示されていることが望ましい。そこで、私案のごとく「(a)あはれ、故宮のおはせましかば。(b)さるべき折は、まうでつつ見しに」までを中将の思惟とみなすならば、単にこの条件を充足するのみならず、末尾の「に」を接続助詞と解くことができて、その結果、はじめの「あはれ」という慨嘆と響きあうかたちで、この部分にしみじみとした余韻を生じることになるのである。そして、もうひとつの根拠は、すでに引用した三例からも知られるように、「思ひあはす」（および「おぼしあはす」）が心中思惟を受ける時には、当然のことながら上に引用の格助詞「と」（や副助詞「など」）を要求する点である。さらに数例を追加しておこう。

・「かくいと素直にしもあらぬものを」と思ひあはせ給ふことも、あらじやはとなむ思ふ。

（『源氏物語』初音巻／日本古典文学全集―(3)・P150）

・「さらば、ひが心にてわが身をさしもあるまじきさまにあくがらし給ふ、と中ごろ思ひただよはれしは、かくはか

なき夢に頼みをかけて、心高くものし給ふなりけり」と、かつがつ思ひあはせ給ふ。

（同若菜上巻／同―(4)・P111）

・「あやし、いかに見つるぞ。まことに例ならぬことやあらむ」と、今ぞ思ひあはすることもありける。

（『狭衣物語』巻二／日本古典全書―上・P258）

・「さは、あさましく、むくつけしと思ひまどはれしは、この人にこそ」と思ひあはすれば、いみじくものつつましげに、答へもせず。

（『夜の寝覚』巻一／日本古典文学大系・P79）

ところで、一般に「まうでつつ見しにも」と校訂されている本文は、有力諸伝本によれば「まうてゝつゝみしにも」である。このことについて、保科恵「堤中納言の解釈私案――程程の懸想の「まうてゝつゝみしにも」――」（「解釈」第四十巻第四号、平六・四）は、次のように述べている（短い文章なので全文を引用するが、その際、「解釈」第四十巻第五号掲載の同誌編集室による「訂正とお詫び」欄を参照した。なお、この論稿は、氏の著書『堤中納言物語の形成』（新典社、平八）にも「補論二・本文表現の形成論理」の一部として表現を改めて収録されている）。

堤中納言の程程の懸想の本文に、「さるへきをりはまうてゝつゝみしにも」（高松宮蔵本による。）という部分がある。土岐武治の校本によれば、諸本には、「まうてつゝみしにも」とするものもあるらしい。そこで、諸註では、底本の本文の形態の如何を問わず、ここを、「参うでつつ見しにも」として解釈する。それが、通行の理解であろう。調査の範囲では、このことに、異論の差し挟まれることは、なかったようである。

だが、「まうてゝつゝみしにも」とある写本においても、誤写を想定して、「参うでつつ見しにも」と理解すべきか否かということについては、検討の余地があると思量する。すなわち、「まうてゝつゝみしにも」は、「参うでて包みしにも」と理解しえないわけではないのである。「参うで」は、中将の行動であり、「包みしにも」は、中将の、姫君への思慕の秘匿を意味する。つまり、接続助詞「て」を介して、前後に観点の転換がある。

堤中納言物語の写本には、中世以前に遡りうるものがない。だが、そのことが、当該本文が誤写であることを証明することにはならないし、また、改訂した本文が正統な本文であることを保障することにもならない。本文を改訂する以前に、提示された本文のままで理解しえないかどうかを徹底的に追求することが、肝要であろう。その一つの例として、私案を提起みたまでである。

これは、「参うでて包む」という何とも奇妙な表現を想定する時点で、すでについてゆけない見解である。が、万一そのような不思議ないいまわしがありえたとしても、では、中将が「さるべき折」に八条の宮に参上して姫君への思慕を秘匿したとは具体的にどのような状況を指すのか、また、そうした事情が、前後の文脈といったいどのように整合することになるのか、といった疑問をどうしても禁じえないわけだ。さらにいえば、同論の最大の問題は、自説を一方的にいい放っただけで、それが「理解しえないわけではない」ことを積極的に論証しようとする姿勢がみられない点にある。「提示された本文のままで理解しえないかどうかを徹底的に追求することが、肝要であ」り、これが「その一つの例」だという以上、自説の妥当性についても「徹底的」な検証を怠ってはならないはずだ。「まうてゝ」の「ゝ」に関していうならば、諸注の処置どおり衍字とみてこれを削除するのが常識的な判断だろう。

五

わが御うへもはかなく思ひつづけられ給ふ。いとど世もあぢきなくおぼえ給へど、また、「いかなる心の乱れにかあらむ」とのみ、つねにもよほし給ひつつ、歌など詠みて問はせ給ふべし。（P108L5～P109L1）

前節の本文から連続する文章。考察の主眼は傍線部の「もよほし」にあるのだが、この語の再解釈を突破口として、「つねに」以下の本文に関する従来の読解に全面的な修正を迫っておきたいと思う。それによって、この作品の骨組みとなる三層構造のありさまがよりあざやかに浮かびあがることになるからである。そこでまずは、「従来の読解」から。

○また一方では、「どうした心の乱れであろうか。」とばかり、何時も恋心がきざされて、歌など詠んで姫君を訪われるにちがいない。（上田『新釈』・通解）

○また「どうした心の乱れであろうか。」とばかり、いつも恋心をお起しになりなりして、歌などをよんで消息をなさるに違いない。（佐伯・藤森『新釈』・通釈）

○また一方どういう心の乱れであろうかという気持にばかりいつもさそわれては、姫君のもとに歌など詠んでおたずねになるらしい。（『大系』・頭注）

○又一方、「（こうして姫君を恋するのは）一体どういう心の乱れによるのであろうか。」とばかり、いつも物思いの

気持をおさそい出しになりおさそい出しになりしては、きっと歌など詠んで姫君に御消息あそばすのであろう。（『全釈』・訳）

○また（一方）、どういう心の乱れからであろうかと（言わん）ばかりに、いつも（姫君への）想いが頭をもたげてはもたげ、歌など詠んできっとご消息なさるのであろう。（『対照』・現代語訳）

○また、「どういう心の乱れのなすわざか」といぶかしいほど、いつも恋の思いがこみあげてきて、姫君に歌を詠んで消息なさるようである。（『全訳注』・現代語訳）

通説はこのとおり、動詞「もよほす」を恋心がきざす、恋情がこみあげるの意に解釈する。「後悔はしながらも」（『評釈』・通釈）、「思ひ起しなされたが」（『全註解』・口訳）、「我れと我が心に問ひたゞされながら」（『注釈的研究』・通釈）等の異見もあるが、これらとて「もよほす」を頭中将の心の動きに関わる語と捉える点では、通説と次元を同じくするものだ。筆者もまた、前掲の旧稿においては、「彼は故式部卿宮の姫君への恋心を押さえることができず、彼女のことが念頭から離れない」などと、大樹の蔭に寄っていたしだいである。

しかし、本文が「もよほされ」ではなく「もよほし」のかたちであることを考慮すれば、こうした理解は明らかなまちがいであった。結論からいえば、この「もよほす」は、

・「船とく漕げ。日のよきに」ともよほせば、楫取り、船子どもにいはく、「御船より、おふせ給ぶなり。朝北の出で来ぬ先に、綱手はや引け」といふ。（『土佐日記』／新日本古典文学大系・P25）

・なほあなたに渡りて、ただ一声ももよほし聞えよ。むなしくて帰らむが、ねたかるべきを。
（『源氏物語』末摘花巻／日本古典文学全集―(1)・Ｐ３４２）

・対面に聞ゆべきことども侍り。かならずみづからとぶらひものし給ふべきよし、もよほし申し給へ。
（同若菜上巻／同―(4)・Ｐ１７）

・人々いたく声づくりもよほし聞ゆれば、京におはしまさむほど、はしたなからぬほどに、といと心あわたたしげにて、心よりほかならむ夜離れをかへすがへすのたまふ。
（同総角巻／同―(5)・Ｐ２７４）

などの例と同様、誰かをせきたてる、何かを催促するといった、ごく素直な意味に受けとめるべきであったのだ。すなわち、頭中将は、このころすでに宮家の女房と「あふ」段階に達していたはずの例の若い男を「もよほし」たのである。それは同時に、彼自身が宮邸を訪れたとする読み方にまったく成り立つ可能性のないことをも意味していて、この作品を理解するうえできわめて重要なポイントとなるはずだ。念のため「また」以下の本文に対する試訳を示せば、およそ次のようになろうか。

◎その一方で、「いったいどうした惑乱であろうか」と思われるほどに、しょっちゅう（若い男を）せきたてなさっては、（求愛の）歌などを詠んで（手紙を託し）、（八条の宮を）訪ねさせていらっしゃるのだろう。

まずは、頭中将の家人である若い男が小舎人童の「しるべ」（Ｐ１０４Ｌ６）を利用して宮家の女房に接近した。す

ると今度は、中将が若い男の恋人を「もののたより」（Ｐ１０７Ｌ６）にして、何とか姫君を口説き落とそうというわけである。このように読んでみてこそ、『ほどほどの懸想』の基本にある同心円状とも、ピラミット状とも、あるいはチェーン状とも形容すべき重層構造の様相が、鮮明に見てとれることになるのではあるまいか。

なお、「問はせ給ふ」という表現は作中に二度現われるが、いくら「主人公」とはいえ、この物語の成立年代を考慮すれば、頭中将クラスの人物に地の文における二重敬語が、しかもこの二箇所にかぎって用いられたとは考えにくい。その点からいっても、「歌など詠みて問はせ給ふべし」の「せ」は使役と解するのがよく、そうなれば、残る「童を召して、ありさまくはしく問はせ給ふ」（前節参照）の「せ」も、自動的に使役の用法ということになろう。

六

さて、物語の最後の一文「いかでいひつきしなとおほしけるとかや」（Ｐ１０９Ｌ１～２）を、①「いかでいひつきしがな」とおぼしけるとかや」、または②「いかでいひつきて」などおぼしけるとかや」と改訂すべきであることは、旧稿で説いたとおりであり、その考えは今も変わっていない。ただし、現在では「て（天）」から「し（之）」への本文転訛を想定する②の案を採るのがよいと判断している。そこで本稿では、「し」と「て」とが交替した例を三代集の中から採取して、実際にいくつか紹介しておこうと思う。

(a)もみぢ葉の散りてつもれるわが宿に誰をまつ虫ここら鳴くらむ　（『古今集』秋下―２０３）

(b)わが背子をみやこにやりて塩釜のまがきの島のまつぞ恋しき　（同東歌―1089）
(c)何に菊色染めかへしにほふらむ花もてはやす君も来なくに　（『後撰集』秋下―400）
(d)来むといひし月日を過ぐす姨捨の山の端つらきものにぞありける　（同恋一―542）
(e)跡もなき葛城山をふみ見ればわが渡し来しかたはしかもし　（『拾遺集』雑賀―1199）

(a)は、諸本に「散りて」とあるところ、崇徳天皇御本系の藤原雅経筆西脇家本が「散りし」に作るほか、藤原清輔本系の保元二年本（前田本・穂久邇文庫本）では「て」の横に「しィ」の朱書が見られる。(b)は、諸本「やりて」に対して、藤原清輔本系の片仮名本（寛親本）が「ヤリシ」の本文をもっている（以上、久曾神昇『古今和歌集成立論』全三冊（風間書房、昭三五）による）。これらふたつの例は、「て」とあるべき箇所が「し」に誤られたケースといえよう。つづく(c)は、諸本に「染めかへし」とあるところ、二荒山本および『後撰和歌集増抄』が「染めかへて」の本文。(d)は、通行の本文が「いひし」であるのに対し、別本系統の宮内庁書陵部蔵伝堀河具世筆本や定家本系統の野坂家蔵堯憲筆本・高松宮家蔵寄合書本・宮内庁書陵部蔵家仁親王自筆奥書本等においては「いひて」となっている（以上、小松茂美『後撰和歌集・校本と研究』校本編（誠信書房、昭三六）による）。そして(e)は、諸本に「もし」とあるところ、異本第一系統の宮内庁書陵部蔵伝堀河具世筆本では「もて」に作る（片桐洋一『拾遺和歌集の研究』（大学堂書店、昭四五）による）。(c)～(e)の三例は、(a)(b)の場合とは逆に、「し」が「て」に誤られたと判断されるケースである。

華やいだ葵祭のシーンにはじまる『ほどほどの懸想』の基調は、どこまでも軽やかで明るく、零落した故式部卿宮

邸の人々でさえもがそうした光彩の中に包みこまれていたのだ。頭中将に仕える若い家人から届いた恋文の扱いをめぐり、年増の女房がすぐに返事をするのがモダンだと若い同僚を笑ってからかい、からかわれた当の本人もまたハイカラな才女とおぼしく心憎い返歌を即座に詠んで答える、というあの場面がそれを象徴していよう。しかるに従来は、作品末尾の一文を「いかでいひつきし」など、おぼしけるとかや」とありのままに整定し、そこに式部卿宮の姫君との交際を後悔ないし反省する頭中将の虚ろな心情を読みとりつづけてきたわけである。が、それがとんでもない誤読であることは、旧稿で指摘したいくつかの根拠に加えて、本稿第五節で述べた「もよほす」の解釈に照らしてみても明らかだろう。『ほどほどの懸想』の軽やかで明るい基調は最後の最後まで保たれているのであって、「何とかして返事をもらって……」とまだ見ぬひとに胸をときめかせる頭中将の姿を描いたところで、話の扉はほほえましく閉じられてゆくのである。